



1面	研究会	開会行事	・ 記念講演
2面	研究会	記念講演	・ 研究発表1
3面	研究会	研究発表1	・ 研究発表2
4面	ステップアップ講座	・ 第70回研修講座	

平成28年11月2日(水) ドーンセンターにて

第25回 大阪府公立学校事務研究大会

を開催しました。

開会行事

『明日の教育を担う学校事務を創造しよう』を大会テーマに開催し、細野会長の挨拶、来賓挨拶、来賓紹介がありました。



記念講演

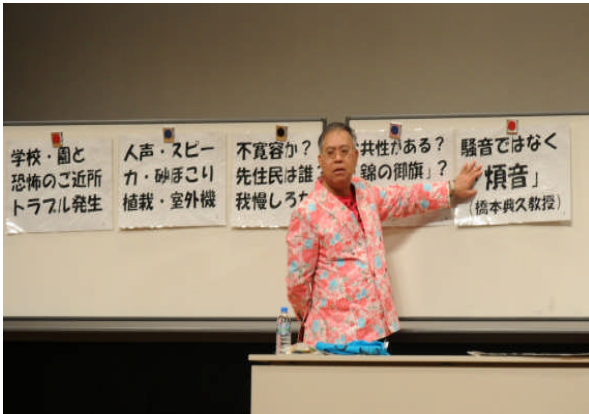
『学校と周辺住民とのトラブルをどう考えるか』

～「子どもの声は騒音かもしれない」という前提で始める良好な関係づくり～

講師 小野田 正利 様(大阪大学大学院 人間科学研究科 教授)

近年、学校と地域住民とのトラブルが全国的に非常に増えています。子どものふるまいや喚声、砂ぼこり、様々な騒音など、学校に付随するあらゆる要素は地域住民にとって「迷惑」なのかもしれないということを前提に、トラブルを緩和し地域住民と共生する方法についてご講演いただきました。

小野田様は初めに、「クレーム・苦情から逃れられる職業はもはやどこにもない。大事なものはそれをどう受け止めるかということと、大きくしてトラブルにさせないことです」と話されました。



そして前提として、「学校というのは地域に迷惑をかけている存在であり、逆に地域が学校に迷惑をかけていることは、ほとんどないということを実感するべきです」と強調され、「学校の近隣には、子どものいる家庭、いない家庭、定年を迎え家にいる時間が増えた家庭、深夜労働により日中に休息をとる家庭などの、様々なライフスタイルの人たちが生活しており、そういった個人志向のライフスタイルが浸透した現代では『学校は公共施設だから』という説明では理解を得られなくなりました」と、学校を取り巻く状況について説明されました。

具体的には、音に関する問題については「例えば集合住宅に住んでいたとして、仲のいい友人が大きな音をたてても気にならないのに対し、嫌いな人が音をたてるとそれを騒がしいと感じてしまう。つまり、音に対する問題というのは、自分と相手との関係の中で起こる極めて心理的・人間関係的な問題であり、音量の問題ではないのです」と近隣住民との関係性の重要さを示されました。

さらに「苦情を言う方の多くは本当に困っていてどうにかしてもらいたいと思っているからこそ、やむを得なく学校に苦情を言い続けています。それを『寛容性がない』と、少数の者の苦しさを多数が押し込めてしまい住民の声を消すのは、問題自体を握り潰すことになるのでやめるべきです」と呼びかけられました。

また、「苦情を言う方に対し、よく『お互い様だろ』と言う人がいますが、第三者からそう言われても納得がいかないものです。当事者同士が分かり合ったときに『お互い様』という言葉が生まれないと意味がない。そして実は、その当事者の中には児童・生徒も含まれており、当事者が出てこずに教職員だけで解決しようとするので余計に腹が立つのです。つまり、児童・生徒たち自らが住民の方たちとの間にどう折り合いをつけるかが大事であり、それを考え実行することこそがアクティブラーニングなんです。Win-Winの関係を作り、形で示さない限り学校は常にTakeであり、Win-Winの関係をどうやって築くかが重要なのです」と強調されました。

最後に「学校は地域に住まう住民の一人だという意識を持ち、住民の一人として行動することが大事です」と学校と地域住民との関わり方について提言され、「今日お話したことが先生方の今後にとって何かのお役に立てればと思います」と締めくくられました。

総務部 西川

研究発表 1

「大阪の学校事務のランドデザインを考える」 ～新たな価値を創造する学校事務をめざして～

大阪府公立学校事務研究会研究部

研究部は、来年度の全事研京都大会で発表を行う事になっており、それに向けて着々と準備を進め、昨年度に引き続き「大阪の学校事務のランドデザイン」についての発表をしました。

冒頭、昨年12月に野村総合研究所が発表した報告の紹介から始まりましたが、その内容は、今後10年から20年の間に、人工知能やロボットに代替可能な職業は49%にのぼり、「学校事務職員」もその一つとしてあげられています。中央教育審議会による「チームとしての学校」の答申では、学校事務職員



は「学校運営事務に関する専門性を有している、ほぼ唯一の職員」とされています。この対照的な評価をふまえ、答申の中で期待されている学校事務職員の役割を考察していくという内容でした。「チームとしての学校」が求められる背景、実現のための方策、その中で私たちの役割、めざすべきは、学校管理運営部門の統括者(トータルプロデューサー)であるとの事でした。

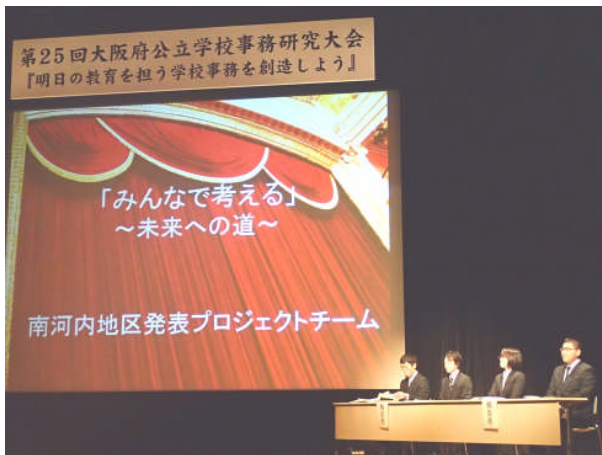
発表後、会場との意見交流が行われその意見の中で「発表の内容は理想型であるが、現在、ますます事務量が増えている中で、それを実現していけるかどうか自信がない」という率直な意見がありました。私自身もそれに共感した思いと同時に、今の煩雑な業務を効率的にこなしていくにはどのような方法が良いのか、そして、理想であるトータルプロデューサーの位置まで持っていくには、現任校で何から始めたらいいのか考えさせられました。来年度の全事研で答えが見いだせればいいなあ と研究部の発表に期待したいと思います。

総務部 松原

研究発表 2

「みんなで考える」～未来への道～

南河内地区発表プロジェクトチーム



今回は、南河内地区の加盟市である大阪狭山市・羽曳野市・松原市の三市で発足したプロジェクトチームによる発表でした。

まず、南河内地区の紹介があり、発表の依頼を受け、チームを立ち上げ、若手事務職員を中心に元気が出る未来志向の取り組みを進め、その手法としてグループワークを取り入れていった経緯と、各市の中堅事務職員をミドルリーダーとし、実際行った内容の詳しい説明がありました。

次に各市から年齢及び経験年数別構成や、市の取り組み等の状況報告がありました。

そして、発表形式が、報告体制から参加型へと変わり、会場の参加者全員でグループワークを行われました。研究集録に載せてあるシートに、それぞれが書き込んでいきます。「()が変われば、私の学校は()になります」とその理由を記入し、その後二人組になって、一方が説明、その相手が必ずそれに反論し、その反論に対して、説得していくという内容です。会場内は積極的なやりとりが飛び交い、一気に活気にあふれていきました。当日は時間の関係上、1回交代のみで終わりましたが、プロジェクトチームは、複数回行い、回数が増えるにしたがって、説明内容も充実し、説得も上達していったとの事でした。

最後にプロジェクトチームの中心になったミドルリーダーの方が、発表の準備を進めていくなかで、「自分たちが得たものは大きく、これからやっていかなければならない事とめざすべき事務職員像が見えてきました。そして何より、市を超えた繋がりを持つ事ができ、良い経験となりました。この報告はゴールではなく、スタートです」と思いを語って、締めくくられました。

総務部 松原



ステップアップ研修講座

10月21日(金)6名の参加を得て、アウィーナ大阪にてステップアップ研修(採用2年目)研修を開催しました。

第一部は「コミュニケーションスキル研修」でした。「自分を漢字一文字で表すなら？」など全3問をグループ内で交流しました。

第二部は「未来予想図をつくってみよう」というテーマでワークショップを行いました。まず付箋に自分自身の「強み」「弱み」、現在の職場の「良いところ」「直した方がよいところ」を記入して大きな紙に貼っていき、説明していきます。次に10年後にどんな事務職員になりたいか、自己実現シートを作成し、自分のキャッチフレーズや今後10年のタイムスケジュールも考えました。

参加者は「校区の事務を総括したい!」「自分発信で学校を変えたい!」など力強く目標を発表しており、とても活発な研修となりました。

総務部 藤後



第70回研修講座

『地方創生 ～学校・家庭・地域連携時代の学校事務～』

講師 日渡 円 様(兵庫教育大学 教授)

11月22日(火)アウィーナ大阪にて、第70回研修講座を行いました。

冒頭、「教育の民主性」「地方分権」「政治的中立」という教育において守るべきことについて触れ、そのうち「地方分権」と「政治的中立」に関しては守られてきたが、「民主性」に関しては、守られてこなかったとおっしゃっていました。

特に学校現場に関しては、教育目標を学校長が決定しているため、民主性が確保されていない状況でした。これまでは、学校現場の多くが 目標(あるべき姿)を定め、現状を把握し、手段(対策)を考えるという営利型マネジメントを取り入れてきました。そのためまず、学校長が教育目標を定めるという学校が多数存在してきました。目標について学校長が決めているため、「教育の民主性」を満たすものではありませんでした。それを打開し、「教育の民主性」を守るためには、現状を把握し、目標(あるべき姿)を定め、手段(対策)を考えるという公務員型(非営利型)マネジメントを取り入れることが必要であると提言されました。ここでいう「現状」とは、家庭や地域の要望などを指すため、教育目標に取り入れることで、「教育の民主性」を保てるというものでした。

最後に「今後、家庭や地域からの声を聴き、取りまとめるという、家庭・地域・学校とをつなぐ役目を誰かが担う必要が生じ、その役目を事務職員が担うべきであり、その姿こそが、今後の事務職員に求められる姿である」と締めくくられました。

今回の研修は、これからの仕事のあり方を改めて考えさせられる研修でしたので、日々の仕事を見直すきっかけになりました。

総務部 長澤